

九州派3人展 山内重太郎・オチオサム・桜井孝身

トキワ画廊(1958)パンフレットの文章

かつて私は、ある学者から「真の認識とは、我々の意識から全く独立した、存在そのものの言葉に耳を傾けることである」ということを聞かされた。勿論、この言葉は、哲学者の認識を言ったものであるが、私はこの言葉から、作画上にも、大きな示唆を得たのであった。

私は、自分の絵画に生々しい物質をもつ、物質そのものの不可思議な存在感、自分の生命によって捉えた「もの」そのものの言葉を、自分の、最も高次な方法によって語らせたい。私は、それを表現するためには、あらゆる素材と、あらゆる方法を駆使しなければならないと考えている。

私は、今度ともに、こうした追求を進めていって、私の作品に、世界そのものの持つ深い意味と、神秘的な言葉を語らせたいと希うのである。

山内重太郎